
デルタル(仮名)

優さん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

デルタル（仮名）

【Nコード】

N0032X

【作者名】

優さん

【あらすじ】

ライヤスローブに育てられた子供は、何を起こすか？！
英雄、反逆者、正義の味方、復讐者

「僕は、魔族生まれたかった」

帰らずの森で起きる異変

「僕は、人間は、種族の中でもダントツ一番の大嫌いだ」

以上

駄作ですよ
気を付けて

設定資料？（前書き）

駄作ですよ。

感想くれると喜んで踊ります。

設定資料？

●ライヤスローブ（魔狼）

普段は、狼の形をしていると言われるが実際は、半人化しているため獣人と間違われる。

知識では、エルフ並みである。

戦闘でも、ドラゴンすら上回る。

毛色が、殆ど違う。

毛並みは、比喩物にならないくらい良い。

誇り高く、気品を持つ、気高い一族。

魔族の中で珍しく、大人しい。

しかし、仲間が、殺されたりすると、その近くの町を完膚なきまで壊す。

いくつか町を滅ばした。

それを、逆手に取られ、殺される。

毛質から、貴族と王族に好まれる。

そのため各国で、乱獲が発生。

今は、殆ど絶滅に近い。

現在、森の奥深くに生息している。

大潮の期間に人化が使える。（満月が近いせい？）

満月の日は、全ての能力1・5倍近く上がる。

新月に近くなると能力が下がる。（子供は、もろに受ける）

P S ・オオカミオトコと一緒にすると怒る。

●キングゴブリン

ゴブリンを統べる王様。

各森に、一匹だけ。

知性があり、会話ことも可能。

稀に人間並みに知識を持つ。

年を取ることにいろんなものがランダムアップするらしい。

体格はゴブリン3倍。

角が2本生えている。

●ゴブリン

最弱の魔族。

原始的な武器を使う。

体格は、50cmくらい。

角がない。

片言で話す。

●ハイゴブリン

角が1本生えたくらいしか変わらない。

だが戦闘では、50匹のゴブリンと一緒。

片言ではなくなる。

●ナガレゴブリン

実際にはぐれた、キングゴブリンに追放されたてから、1年くらいさ迷うとなる。

体格は、ゴブリンと変わらない。
気性が荒く、凶暴である。
戦闘能力は、ハイゴブリンと一緒にくらい。
小さく角が1本生えている。
たまにゴブリンを連れている。
言葉は、片言。

●オーク

二本歩行で大きな豚。
大きさは、人間と同じ。
戦闘力は、ゴブリン10倍。
たぶんあんまり出番がない。(多分)
あと片言。

●魔女

人族から魔族になった。
多くの魔女は、人の中で暮らす。
寿命を延ばした結果、魔族になった。
魔法使いから魔女になることが多い。
男もいる。
けれど魔女と言われる。
由縁は、初代魔女が女だったから。
魔女の半分以上は両性具有である。

●オオカミオトコ(オンナ)

こちらと同じく魔族になった者。

ライヤスローブとは、逆に満月にかつてに獣化する。満月に戦闘能力だけ、1.3倍になる。

獣化すると凶暴化する。

人族が噛みつかれるとオオカミオトコになる。

訓練すれば、半獣化になれるし、凶暴化を抑えられる。

見つかりと捕らわれ、牢獄に。

主に制御できるまで牢獄で過ごす。

制御できてても奴隷まで地位が落ちる。

オオカミオトコ（オンナ）は、ライヤスローブの血を入れた結果である。

ライヤスローブとは、天と地ぐらい差がある。

吸血鬼とは、犬猿の仲である。

●吸血鬼

人の中で暮らす。

主に人族の血を吸う。

吸血鬼のなり方は、吸血鬼の血を入れると圧倒的の血を浴びる、の2通りある。

吸血鬼の大元の祖先とその一族を真祖という。

真祖は、異常な力を持つ。

新月にかなり力を増す。

血を吸われると吸血鬼なるなんてありえない。

人族の都合の良いようにしている。

ライヤスローブとは、仲がいい。

しかし、オオカミオトコとは仲が悪い。

○人間

もつとも能力がバラバラ、強い弱いがはっきりしない。
強ければ、ドラゴンすら倒す。
弱ければ、ゴブリン以下である。
多くの人は、弱い部類。
魔法が使える人がある。
いろいろめんどくさい種族。

○ドワーフ

小人のモジャ毛でおっさん顔
何でも作る職人。
手先が器用。
鍛冶や家具、裁縫、建築など作ることの職人である。
人間と共存している。

○コビット

小人で童顔。
医者や薬剤師などの職人。
魔法が使える。
人間と共存している。

○エルフ

平和主義。

人族でありながら、唯一共存していない。
長命であり、知識も優れるいいことばかりな種族。
掟を重んじる。
迷いの森に住む。

○ 獣人

耳と尻尾以外は、人間の形。
人間に捕まえられると奴隷になる。
主に奴隷が多い。
拳闘士、剣闘士だけ職業。
闘士は、成績を残すと平民になれる。
最大の競技で優勝すると発言権が貴族になる。
記録では、二人が貴族になった。
人間を恨んでいる。
一部を除き、隠れ里に住む。

精霊

魔族でもなく、人族でもない。
会うことは、奇跡に近い。
会うといいことあるらしい。
飛ぶことができる。
水を泳ぎ、火で舞い、土に潜る、花と戯れる。
いろんな場所で発見されている。
捕まえるのが困難で、裏で高額で取引される。
捕まえる、売るのは、違法である。

▼帰らずの森

入った人が誰も帰らなかったから、そう名付けられた。
魔力の流れが異常で迷い、魔族に殺されるから。
主人公が育った場所。

▼迷いの森

帰らずの森と似ている。
しかし魔族がいないため死ぬことが少ない。
早くで一時間、遅くて、二日でできる。
なぜか入ったところから出てくるから名付けられた。
エルフが住んでいると言われる。

▼半人化

魔族が使う。
見た目は、人間だが、耳や尻尾が残ってしまう。
よく獣人と半獣化と間違われる。
使うのは、ライヤスローブなどの魔族が使う。
人間くらい知識が必要。

人間は、そんな能力があるとは、あんまり知られてない。

▼人化

魔族が使う。

完璧に人間の姿になれる。

能力と力は、変わらない。

見破るのが難しい。

スライムだけが使うと思われる。

それ以外だと人族はおるか、かなり魔族でも知らない。

▼半獣化

一定時間、獣人になる。

爪がのびる、力など増す。

本能が強くなる。

▼獣化

自分の意思で行うのこと。

完璧に獣になる。

理性がほとんどなくなる。

半獣化よりも強いが制御が難しい。

オオカミオトコも獣化と呼ばれるが、勝手に変わるため、ホントは、獣化とは言わない。

▼古代文字

一つの文字の意味は、本、一冊ぐらいになる。
今の文字は、古代文字をかなり簡単したもの。

漢字は、その過程でできたもの。

▼魔法

魔力の統べる法。

法に従って魔力を変化させる。

不可能を可能にする方法。

▼古代魔法

魔法の原点。

難しく理解できない。

しかし、魔力の体に纏うことも古代魔法になる。

だが、誰しも使えるために、古代魔法であることは知らない。

▼詠唱魔法

魔法を使う方法。

言葉に魔力を込め、世界に働きかけ、真名で発動する。
ポピュラーな魔法。

利点

魔力の消費が少ない。

簡単に発動する。

一段階、威力が増す。

欠点

詠唱の時間が掛る。

詠唱で何を使うかわかる場合がある。
詠唱に邪魔が入ると発動しない。

▼詠唱破棄

真名だけでは、発動させる。

詠唱を唱えないのこと。

詠唱を途中から唱えることも入る。

戦士系も好んで使う。

利点

相手に読まれにくい。

一言で発動する。

戦略が立てやすい。

欠点

魔力を喰う。

覚えるのが難しい。

集中しなければならない。

▼無言詠唱

魔法を想像し、想像に魔力を込め、真名を頭で唱え、世界に働きかける。

高等技術で、戦士系は、まず覚えない。

魔法使いでは、使えて一人前になる。

想像が完璧に近いほど、威力が上がり、魔力が喰わなくなる。

使えないと半人前扱いされる。

実際、使う機会がなく。

威力とスピードが、詠唱破棄に負ける。

ただし、使い手によっては、瞬時、高火力、魔力が少ないなどいいことずくめ。

利点

いつは、発動するかわからない。

欠点

想像が弱いと発動しない。

使い勝手が悪い。

熟練度がわかる。

▼魔法陣

魔法を言葉でなく、文字や形にしたもの。

魔力を通すことで世界に働きかける。

陣を書くことに時間が掛る。

少しずれただけで、使えなくなる。

しかし、陣が壊れなかったら、永久的に使える。

高度の魔法陣は、壊れたら暴走、爆発する。

主に武器に書かれる。

利点

集中する必要がない。

何度も使える。

詠唱魔法より強力である。

欠点

魔法陣が壊れると何もできなくなる。
相手に制御を奪われることもある。
時間が掛る。

▼真名

真名とは、魔法の真名と人の真名がある。
真名は、神様にあげる名前。

魔法の真名とは、発動させる方法。
魔法は、真名がないと無いも起きない。
人の真名は本当の姓名。

人族は必ずつける。
両親は、誰も教えてはならない。
よく魔法（呪い）に使われる。
効力は、

氏名<<<姓名<<<越えられない壁<<<真名
なっている。

真名を知られる＝死ぬ、操られる。
神に差し上げた名前を使うことだけでも呪いに掛かることもある

やり方は、人の型に紙を切り、真名を書き、燃やす。
エルフは、川に流す。
葉っぱでも出来るが紙でやるのが普通。

▼奴隷

姓名だけ。

罪によつて落とされた。

または、その子孫。

殺しても罪にとはれない。

今日、生きるのに必死。

▼平民

氏名が与えられる。

または、名乗れる。

殆どの人間が平民である。

生活は、あんまりよくない。

▼貴族

王族から中間名を与えられる。

階級が分かれている。

平民から、貴族になるのは、難しい。
数がない。

▼王族

漢字が使われている。

王様と王妃の子供だけが全て漢字が使われる。
先代は、氏名だけ漢字。

▼リカル

この世界の共通通貨。

1000円が1銅リカ？である。

1銅リカル＝100銀リカル

1銀リカル＝50金リカル

人物紹介？

○名前：ライ

種族：人族（人間）

年齢：14歳

身長：151.7cm

体重：50.8kg

性別：雄

（典型的な日本人）

この作品の主人公

顔は、普通。

瞳は、黒。

髪も、黒。

左の眉毛を切るような小さい傷跡がある。

髪で目にギリギリ入らない前髪。

後ろ髪は、一つに結んで腰くらいに伸びている。

理由は、尻尾がないから、尻尾みたいにしたい。

手足に噛み傷の跡がたくさんある。

体には、傷跡ない。

自分以外で人族を見たことがない。

帰らずの森から出たことがない。

外の世界に興味は、あるが出たいと思ったことがない。

弟妹達に、勝ったことがない。

逃げることなら、最強。

オールラウンドタイプ

好きなもの

両親

弟妹

嫌いなもの

人間（怖い）

○名前：クロア

種族：魔族
ライヤスローブ

年齢：不明

身長：2・7M

体重：不明

性別：雄

毛色：黒

カリスマ性、実力戦闘知識がある。

戦うこと特化している。

ルカには、頭が上がらない。

帰らずの森でリーダー。

ライの育て親である。

この森、最強である。

5年前までは、この森には、ライヤスローブが沢山いた。
事件が起こり、クロア、ルカと子供^{ライ}だけになった。

ライの母とは、因縁がある。

人間は好きだが、この森を守るため、入ったに殺している。

前衛タイプ。

戦闘は、狼の姿で戦う。

好きなもの

家族

帰らずの魔族

嫌いなもの

戦争

争い

○ 名前：ルカ

ライヤスローブ

種族：魔族

年齢：不明

身長：2.7M

体重：不明

性別：雌

毛色：銀

膨大な知識を持つ

本が大好きで、本を読むと読み終わるか、誰かが声掛けるまで止まらない

よく、本を買いに人族の村まで行っていた。
図書館に入り浸る

人間を劣等種だと思っていた。

やはりライの母と因縁の結果。

人間は、尊いものだと理解した。

怒ると魔法でよく潰す。
異常に怖い。

後衛タイプ。

戦闘は、魔法など。

好きなもの

家族

本

嫌いなもの

リビングデット

○名前：ウエア

種族：魔族ライヤスローフ

年齢：10歳

身長：1.7M

体重：不明

性別：雄

毛色：灰色

誠実で大人しい。

クロアとルカの子供。

ライのことを慕っている。

冷静に局面を観察して行動を起こす。

最近では、遊ぶのでライ以外で遊ぶ。

不満は、二年前から、ライが訓練で遊んでくれないこと。

不安は、チハルが自分のことより、ライのことに好いこと。
だが仕方ないと思っている。

チハルを溺愛している。

戦闘は、中衛タイプ。

分析をかけてから、行動に移るため、初動が遅い。
動き出したら、止まらない。

好きなもの

家族

妹

嫌いなもの

昆虫

○名前：ヴォルフ

ライヤスローブ

種族：魔族

年齢：8歳

身長：1.5M

体重：不明

性別：雄

毛色：赤

ウェアの逆の性格。

子供の中で群を抜いて、体力がある。

本能まま行動を起こすため、問題を起こす。

弱いものは、興味がない。

だが、ライは、別。

前衛タイプ

真正面からの勝負が得意。

好きなもの

家族

悪戯

リン

嫌いなもの

スライム

○名前：リン

ライヤスローフ

種族：魔族

年齢：7歳

身長：1 M

体重：不明

性別：雌

毛色：赤

お転婆でよく勘違いする。

常識も足りない。

ライを兄として好いている。

朝が弱いライを起こしている。

前衛・中衛タイプ。

トリッキーの動きで攻撃する。

好きなもの

家族

お肉

嫌いもの
罨

○ 名前：ルーウ
種族：魔族
年齢：6歳
身長：50cm
体重：不明
性別：雌
毛色：金

ガルの姉。
元村長の子供。
ほとんど無口で必要最低しか話さない。
ガルに対して溺愛している。
よく遊ぶ。
後衛タイプ
弓で戦う。

好きなもの
家族
弟

嫌いもの
人間

○ 名前：ガル
種族：魔族

年齢：6歳
身長：62cm
体重：不明
性別：雄
毛並み：銀

ルーウの双子の弟
ヴォルフと一番の仲良し。
普段は、おちゃらけているが肝心のときは、真面目。
ルーウ曰く、もう少し真面目になって。
オールランドタイプ
スピード活かしたヒットアンドウェーイ。

好きなもの
家族
姉
悪戯

嫌いなもの
シリアス

○名前：チルハ
種族：魔族ライヤスロープ
年齢：6歳
身長：40cm
体重：不明
性別：雌
毛色：黒

クロアとルカの子

ライのことをお兄様と呼ぶ。

ライの一番の理解者でいつもライのことを考えている。
人間になりたいと思っている。

ライヤスローブより人間。

タイプは決まってない。

好きなもの

家族

ライ

人間

嫌いもの
特になし。

第1話

この世界は、全てが平等だと誰かが書いた。
そんなの嘘だ。

何処が平等だ。

種族、能力、身長も体重、皆違う。

書くならある程度、平等だ。

死んだ者は、蘇らないし、生物は、死ぬ。

ただ、生きるために死に。

ただ、死ぬために生きる。

そして今日もある程度、平等だ。

僕の住む、ここは、帰らずの森。

僕は、ここから出たことがない。

僕の世界は、ここだけだ。

ここで生き、ここで死ぬ。

人族にあつたこともない。

同じ人族とは、会ってみたいが僕は、ここから離れたくない。

家族がいる、この森から。

僕の両親は、魔族の中のライカンスロープというらしい。

ライカンスロープとは、今、いない狼が進化したらしい！？

満月なる前の日と後の日の2日は、完璧に人の形になれる。

誇りと義理と人情を大切にしている。

幻の魔族。

絶命寸前の魔族。

僕の両親や弟妹や周りは、全て魔族だ。

僕は、人族。

僕だけが、人族だ。

やはり、この世界は、ある程度平等だ。

魔族とは違う。

成長、体力が違いすぎる。

魔族は、知識が弱い、上位魔族の知識は、人間並み、いや人間以上ある。

僕は、小さいころから努力した。

模擬選では、同じ生まれのゴブリンに負けた。

体力は、父さんが教えてくれた。

知識は、本と母さんから教わった。

けど弟妹たちには、勝てない。

「…どうしてどうして魔族じゃないの？」

小さい頃、僕は、尋ねた。

両親は、苦笑いしながら。

「種族がそんなに大事かい？」

僕は、コクリと頷く。

「そうか、たしかに大事だな、けれど大切なのは、心だと思う」

「心？」

今になってわかる。

「俺達は、人族と魔族を差別したか？」

「してない」

「魔族と人族なんて些細な問題だよ」

「そうかな？」

「そうだよ、私たちは、ライを愛してるよ」

「まずは、自分を信じる」

「うん」

まだ自分を信じることができない。

両親には、帰らず森でリーダーしている。

支配嫌う。

父さんは、王にならず、リーダーになった。

両親は、自分からあんまり意見言わない。

言つと必ず意見が通るから言わないらしい。

僕には、少し難しい。

僕は、小さい頃から

生きるために知識、体術を教えてもらいながら。

ほぼ毎日、知識と体術、魔法を覚えることする

やらない日は、弟妹たちと遊んだりするからだ。

教えてもらっている先生は。

知識は、母さんから。

体術は、父さんから。

魔法は、古い書物から。

やはり、種族の違いを感じる。

知識は、弟妹たちが覚えるより時間が掛かる。

体術なら、3倍掛かる。

しかも姿を変えられることでのいろいろ出来そうだし。

十歳の弟妹達に知識か、体術もしくは、両方で負けている。
模擬戦闘するがギリギリで勝てないでいる。

魔法は、危険なので使わない。

両親は、使えるけど体術の方が早いので使わない。

弟妹達は、みんな揃って

「兄さん、凄い」

全然、凄くない。

お前たちは、なんなのだよ。

しかも年下だろ。

たまに弱くなつて負けようとするこことやめない。

だから僕は、

他の種族とは戦うことは、しない。

ライヤスロープの子供に負けているのだよ。

他の種族とは、必ず負けるだろ。

同じ人族には、勝ちたいな。

.....この森にはいないけど。

勝てる気しないけど

.....はぁー.....

あぁー何で人族に生まれたのだろ。

魔族だったら、ホビットくらいなら、スピードで翻弄して隙をついて倒せるかも。

あぁーなんで人族なのだろう。

ため息場面が多いな。

..... はあー.....

.....

「兄...ん、...きて.....」

「？」

「兄さん、起きてください」

「?!」

体が揺さぶられる。

起きたくないので我慢。

「最終兵器」

無視だ、無視。

「フウ」

「フア〜い」

耳に息が掛かり、びっくりした。

「あ、やっと起きた」

「おはよう、けど、今は、やめろ」

ビツクリする

理解したら、恥ずかしい。

「え」

そんな、え、顔するなよ。

すぐに顔が変わる

なんでよって不機嫌な顔。

「なんでよ」

「いや、恥ずかしいだろ」

「別いいじゃん、私との中だから」

「イヤです」

絶対イヤだ。

負けない。

「どうしても？」

「どうしても！！」

かわいい声＋かわいい顔で言うが屈しないぞ。

絶対にな。

……絶対に

……ぜつ……

……
「ごめん。うそ。うそ。毎朝それで起こしてください」

リンは、泣きそうな顔になりそうになった瞬間

僕の敗けが決まった。

ああ、僕、絶対調。

けど弟妹の涙は、無理だ。

大切な誕生日プレゼント

この家の唯一の時計を見る

「リン、手伝ってくれ」

「了解」

「今日、満月か」

「そうだよ。耳と尻尾ないでしょ。みんな満月だからたくさん食べるよ。私ももちろんね」

僕は、小さい兎を三匹捕まえた。

リンは、鹿を二匹。

……わかっていただけさ。

しょうがない。

.....それは無いんじゃない。

僕、朝から絶好調に

負けます。

弟妹に負けています。

捕まえた兎を火の魔法で焼く。

そして白い石を風の魔法で少し削るて焼けた兎掛ける。

やはり魔法は、便利だな。

ちなみに鹿は、リンが料理している。

朝食で終わり、今日の訓練を考える。

昨日は、一日、書物を学んでいたな。

今日も、昨日余った書物を読み、昨日と今日の分の体術を鍛え、魔法プログラムを考えることにしよう。

朝飯を食べて弟妹達は、元気に森に遊びに行った。

「さて今日、頑張るぞ」

両親は、珍しく不思議な顔して

「何でそんなに頑張るのか？」

聞かれたがこつち聞きたいくらいだ。

頑張んなければ弟妹達にいろんな面で負けてしまう。
なら頑張るしかないじゃないか。

「父さん、母さんに追い付きたいから」

「そっか」

「応援するね」

両親と答えた。

「おう、頑張るよ」

「なら、組手やるか」

予定変更、体術だけを徹底的に。

「あれ以来、組手は、やらなかったし。やろう」

「わかった、夜になってからな」

「了解、じゃあ、1日、体術をしよう。」

「怪我だけは、しないでね」

「組手以外なら大丈夫だから」

「あなた、気を付けてなさいよね」

母さんの有無を言わせない。

「はい」

大きな声で答えた。

組手は、二年前に一度も触れられず、ボコボコにされた。

それ以来、やらなかった。

余談だが、母さんがキレた。

う……ん……………あれは……………怖かった。

弟妹と組手をした。

スピードとパワーがある。

しかし形がなつてないから簡単に避けること出来る。
僕は、避けるだけになってしまい。
組手なくなった。

負けてから、二年間は体術に力を入れた。
減る時間は、読書の時間だ。
だけど読むスピードが上がったのでプラマイゼロだった。

ランニング、全力で森の中を一時間を走る。
十分休憩。

次、型の練習、ゆっくり意識して三時間。
昼飯食べに戻る。

次、武器の使い方、三時間。

（武器は、たまに両親が持ってくる）
続けて、ナイフだけを徹底的に二時間。
家に帰り、休む。
家族で飯を食う。
待ちに待った。父さんと組手。

人型の父さんは、構える。
僕も同じ形なので同じく構える。
でも二年前とは違うよ、父さん。
同じ形でも中身が違う。
自分で考え、弱点なくし、長所伸ばした。
書物から吸収し、取り込んだ。
スピードが足りないなら、技でカバー。
力が足りないなら、相手の力を利用する。
防御が弱いなら、気力で耐える。
それが僕の戦いだ。

父さんが、右手殴る。

顔に向かってくの同じく、右手で反らし、左で殴る。
当たる。

あれ、父さん調子悪いのかな？

………ボーン………

左手で殴られ、かなり吹っ飛ぶ。

ですね。

やっぱり、勝てない？！

親父が一番弱い、組手なのにな。

立ち上がる。

気合いだ。

勝てる、勝てない。

関係ない。

………ボコ………ボコ　ボコ　ボコボコ　ボコボツボツコ　バキボコ
徐々にエスカレート。

三時間後

………ボコ………ボコ………ポコ………ポコ………

体中ボロボロ。

けど僕も父さんの顔ボコボコにしたぞ。

………ドーン………ボーン　バサバサ

吹っ飛され木にめり込む。

ああ、もう無理。

僕は、気絶した。

第2話

目を開けると暖かな赤い光が見えた。
「どうやら朝日か？」

僕は、今の状況を確認する。

詠唱破棄で魔法を使う。

「トルメ」

場所：僕の部屋

時間：夕方

日付：不明

状況確認完了

危険度 1%

生命の危険度 10%

体の状況を確認

全体：アザだらけ。

足：ガクガク。

手：筋肉痛でかなり痛い。

胴体：殆どが急所は、外れている。

だが急所以外は、アザが出来ている。

顔：二倍に腫れ上がっている。

体の状況確認完了

日常：異常なし

魔力：使用可能

訓練：2日禁止

快復：約3日

全て確認

魔力を快復当てる

完了

オールクリア

今の魔法は、現状確認のする魔法。

周囲の観察するために使う。

魔力を使い、六感を全て強化。

周囲の状態、体の異常、快復まで時間を教えてくれる。

これが無ければ、僕の体は、壊れていただろ。

人間の体は、弱い。

魔族は、壊れなくとも。

人族は、壊れてしまう。

だから、壊れるギリギリまで訓練をしている。

僕は、それくらいしないと生き残れない。

良くも悪くも弱肉強食だ。

人間のルール、法などはない。

だから僕は、訓練する。

そして、両親みたくになりたい。

この世界（この森）で、僕は、最弱に近いだろ。

なぜって昔、両親は勇者？と言うう人に戦ったらしい。

二人係でも逃げるのがやっとだった。

ドワーフとホビットは、武器と魔法のスペシャリスト。
人間と同じくらい強いといわれる。

人間とは凄い。

犬と言う、大きいもので狼くらいのをペット？（飼っている）にしているらしい。

人によつては、ドラゴンすら飼っている。

…… オイオイ …… 異常だろ。

…… それすらもそれと戦う魔族って …… それ …… ないだろ ……

…… 勝てる気がしない …… はぁー …… この世界

は、化け物だらけだ。

下に降りる。

ボクハナニモミナカッタ。

正座シテイル父サン何テ。

サラニ重リ追加ヲ持ッテル母サン。

ナニモ見テナイ …… 僕は、何も見てない …… 。

…… 早く治して最も訓練しよう。

クロアサイド

俺が秀才なら、ライ、天才だ。

圧倒的な戦闘を持つが魔族に組手が出来るなんて。
ライヤスローブ

子供たちと本格的に模擬戦する。

ライヤスローブの子供は、ドラゴンより格段に強い。

しかも殆どが劣っているのに。
わざと負けているようにも見える。
少しライの考え方がわからない。

やはり、戦闘技術は、異常の一言。

高度の知恵

知力

物事の真偽を見極める

判断力

リスクをチャンスに変える

決断力

未来を見ているような

先読み力

そして何より力とスピードをすら凌駕する

技と体術

知力以外の能力を封印されているにも関わらず。

封印のことは、また今度、説明しよう。

組手して判ったこと。

体術、技は、俺を越えてえる。

完成度が低いが。

戦闘経験積みめばよくなるだろ。

母さんは、何か勘違いをしている。

たしかに人間は、ライヤスロープには、体術では、勝てないだろ。

二年前は、触れることも出来なかったのだから。

二年間がそうさせたのかわからない、もしかしたらあれは原因があるか？！

あのボコボコにしたライを見た瞬間、俺は、母さんに潰された。（
そのままの意味で）

ボコボコにした、ライを見た。
両手の骨は、折れている。

体中、アザだらけ、見事に急所は、外していやがる。
対して俺は、3、4発食らっただけだ。

しかし、1発が重い。

ゴーレムぐらいだ。

踏んだり蹴ったりだな。

顔を緩める。

ああゝまた母さんに怒られる。

しかし、顔は、恐怖に怯える顔になった。

ルカサイド

父さんとライが帰ってきた。

ちなみに、子供達は、もう寝ている。

父さんが少しボコボコになっている。

あ、手加減したのかしら。

前の組手で一発も喰らわなかったこと考えるとね。

ライは、ボコボコで気絶している。

あれ、あなた二年前を忘れたのかな？

「ふふふっ」

ブアーンと黒オーラが出る。

あなたの顔が引きつる。

頭のどこかがブチと音がある。

あなたは、二年前と変わんないわよね。

「母……さん……違うよ」

「……………」

絶対零度さえ凍る視線を向ける。

「……」

「……………」

私からは、何も言わない。

「ごめんなさい」

「あなた、あの子は、人間ですよ、魔族じゃないですよ」

二年前もそうやって魔族と同様に考えっていると死んじゃうでしょ。

「いや……しかし」

「いいわけはいいの、マーハン」

マーハンは、重力魔法。

空気を物体化させ重力操作で動かす。

そして相手を潰す、魔法。

透明で見えにくい。

ドン、ドンとなる。

魔法で夫を床に潰す。

床が壊れる。

地面に埋もれる。

20くらいかな」

防音で良かった、良かった。

「正座で3日」

「いや「…………」はい」

やっぱり才能がないのね。

あの子。

でも子供たちに比べると、知力が少ないけど、知力の応用を使っている。

知力がないのは、論外

知力が知って、三流
知力を使って、二流
知力を応用して、一流

もうこの森の参謀は出来る。

魔法は、私並みに使える。

知力を応用して魔法もオリジナルの魔法作り、今ある魔法も改造している。

体術のダメな。

典型的な後衛タイプだよな。

私と同じ。

今度、弓、ボウガンでも教えましょうか？

正座している、夫に重りを載せる。

「ちよつと重り100キロあるのだけど、聞こえている。聞こえてます」

体術なんて痛いだけでしょ。

あんなにボロボロになつて。

再生魔法なんて覚えて体術を覚えようとする何って。

両親と同じになりたいなんて」

「動くよ、重り取るよ」

「フリーズ」

フリーズは、拘束魔法。

相手の動きを止める魔法。

一時的の魔法だが、重りに入っている魔法陣で長時間可能。動きが止まる。

「まじかよ、これで三日、無理無理無、何すフガ…ウウウ」
五月蠅い。

魔法は、使わない。

魔力は、もったいないじゃない。

動けないあなたは、口に布だけで十分だわ。

夫なんて目指さなくて。

私だけをめざしなさいね。

早く私と同じになるように待っているわ。」

第3話

??サイド

今、私は、帰らずの森にいますわ。

馬車で国に帰る途中、盗賊に会い、護衛長に裏切られました。

ここに逃げるしかなかったわ。

持ち物は、古い剣とほんの少しの水。

帰らずの森に挑むには、無謀な状態です。

たまたま拾った剣は、運が良かったわ。

剣術も習っているのよ。

これで、ゴリブンぐらいなら何とかなるわ。

けれど、生きては帰れないでしょうね。

最後まで、必ず生き抜いてやるわ。

ライサイド

二日間、訓練ができないから、普段は、読まない、怪我を治す魔導書を探した。

その間、父さんは、やはり、正座していた。

しかも謔言のように「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい」を繰り返していた。

誰もいないかわらず。

母さんに言ったら。

「あらら、ウフフフ」というだけだ。

全然取り合ってくれない。

それどころか「僕の怪我が大丈夫なのか？」聞いてくる。

「僕は、いいから父さんを許して」と言う
「アララ、うふふふ」だけだった。
うん、母さんには逆らわない。

怪我が治ったので訓練を開始したかった。

朝ごはんが食べ終わり訓練するぞ、意気込んだとき。

「ライ兄さん、今日は、訓練じゃなくて、みんなで遊ぼうよ」
チルハが楽しそうに言う。

頭の中では、もう遊ぶのが決定しているようだった。

うーん、どうする？

3日間、訓練できないのは、痛い。

けれど、弟妹達と最近、遊んでなかったから。

しかし、訓練をと悩んでいるうちに、チルハが泣きそうな顔になっていた。

「…ライ兄さんは、私と遊ぶのがきらいでるか？」

「そんなことないよ、遊ぶよ。チルハと遊ぶのが大好きだから。」
チルハが上目づかい＋涙目でいわれたのですぐに返す。

まあ仕方ないかな。

「あれ、訓練は、いいの？」

「うるさいリン、訓練は、いいんだよ」

僕は、少しイライラしていたみたいだ。

「へえー、そんなこと言いつていいんだ」

負けが決定した。

こうして弟妹達に負けつつ遊びに付き合うことになった。

よくよく考えてみると弟妹たちとは、1ヶ月ほど遊んでなかった。

不満も溜まっているだろうなと思っていた。

案の定、溜まっていた。

「ライ、チルハを泣かせた、って本当か?! 嘘だよな?! 何とか言

えよー!!」

ウェアが首を絞め聞く。

リン、チクリやがったな。

ウェアさん締まって話せないよ。

「うははは」

リンが大爆笑。

リン、あとで覚えていろよ。

「やれやれ、もっとやれ」

ヴォルフ、煽るなよ。

「……………」

ルーウとガル、助けって。

止めようとオロオロしているチルハ。

ああ癒される。

「おい、どこ向いている?! もっと絞めてほしいのか?」

「…これい…じょうは…む」

「きこえないよ」

これ以上は無理——。

今日の僕は、絶好調に負けます。

遊びは、鬼ごっこ。

命の危険がなければ、何でもありの鬼ごっこ。

鬼は、一人で、増えない。

鬼以外は、鈴を付ける。

一定時間逃げ切れれば勝ちである。

逃げるのは、得意だが捕まえるのは、難しい。

「時間は、2時間、場所は、迷いの森だけでいいか?」

僕は、みんなに問う。

「魔法使えるのは、兄さんだけなのでなしだよ」

ウェアが追加をする。

「罾もなしがいんじゃない？」

「リン、それは、無理じゃない。よく罾にかかるからって、ライが無理じゃない」

「だね、僕は、悪戯できなくなるよ」

双子がリンに反論する。

「はいよ」

「何でもいいから始めよぜ」

ヴォルフは考えなし。

「鬼は、私がやりたい」

鬼は、リンで決定した。

どうせ負けるなら楽しもう。

なぜか見つかりを追われていた。

チルハと一緒に逃げっていた。

リンサイド

ライの気配は、わかりやすい。

森を少しでも駆けまわればみつかる。

ついでにチルハも見つけられた、ホントにラッキーだ。

「下に注意」

ライが言う。

気にしないで走る。

ドテとこける。

「いった」

どうやら足元に紐があり、足が纏れてこけてしまったみたいだ。すぐに立ち上がり、走る。

せっかく距離が近づいたのにまた離れてしまう。

「下に注意」

ライは、同じことを言う。

今回は、下に注意しながら進む。

けれど今度は、上にロープが張っており、首にクリティカル。
また離される。

「上下に注意」

また言う。

今度は、上下左右も注意する。

少し遅れるが持久戦にする。

「なんてな」

これには、頭にきた。

もう考えなしに行こうと考えた瞬間。

「うわぁー」

落とし穴に落ちた。

「分かれるぞ」

上では、聞こえる。

ライとチルハの鈴の音が違う方向に進む。

足が遅い方がライだ。

畏で疲れたのか、足が遅くなり、草むらに入る。

草むらで隠れたつもりだろ。

「ミツケタ」

リンリン鈴が鳴る。

逃がさない。

え、兎？！

とりあえず捕まえた。

首に鈴が付いていた。

お腹には、紙が張っており。

『ごくろうさま』

と書いてあった。

「……………ワォ——ン」

とりあえず怒りが抑えられなかったので吠えた。

チルハサイド

ライが手を繋いで逃げるなんて。

あのとき一緒にいたいだよ。

あの時、ライはこう言った。

「罨は、常識で作るので3流

相手の行動を読んで作るのは2流

相手の行動をコントロールして1流」

と言っていた。

まず声を掛けたのは、相手の行動を制限させるため。

二回目もそうだった。

そこからリン姉さんが罨に掛っている間、私は、声を出すなど隠れていると紙で書いてあった。

なぜかわからないが指示に従う。

リンは、ライ兄さんを追って行った。

ああー、最後まで一緒にいたかったな。

15分後、叫びえが聞こえ、すぐに見つかったが捕まえることなくこう尋ねた。

「ライは、何処にいるうー!!」

リン姉さんが怖かった。

ライサイド

捕まるのは覚悟していたが、タッチの代わりに殴るってどうゆうこと。

マウンド決められドカドカとラッシュの嵐。

ものすごく痛い、完璧に治ってないだから。

復讐なんてするものではないね。

しかも、鬼になっただけで見つからない。
今日は、絶好調の一日だった。

第3話（後書き）

このタイトル募集

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0032x/>

デルタル(仮名)

2011年11月11日07時36分発行